

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第143号

イザヤ 65:1

平成19年8月31日

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられた。諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。私、ダニエルは、私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は、私を脅かした。『第四の獣は地に起こる第四の国。彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手によだねられる。しかし、さばきが行なわれ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』 ダニエル書 7：13 - 27

人の子の来るのは、いなくが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が太陽と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。だから、目をさましていなさい。用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。

マタイ 24：27 - 44

また、私は見た。見よ。白い雲が起り、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」そこで、雲に乗っておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。 ヨハネの黙示録 14：14 - 16

イエスは、ご自分のことを語られるのに、「人の子」（ダニエル書 7：13他）という表現を好んで用いられました。この表現はマタイの福音書だけでも少なくとも八回用いられています。イエスが用いられるまではほとんど用いられることのなかったこの特殊な表現をイエスはあえてダニエル書からの引用で用いられましたが、「神の子」（ヨハネ 11：4）とか「インマヌエル」（イザヤ書 8：8）とか「ダビデの子」（マタイ 21：9）のようにメシヤを明確に指し示す用語を用いられなかったのはなぜでしょうか。何か深い意味があるに違いありません。

まず、ローマ帝国の管轄下という当時のイスラエルの国家情勢、社会情勢を考えますと、イエスは、政治的な関わりを避けられて、思慮深く行動されたことが挙げられます。父なる神のご計画に従って歩んでおられたイエスは、ご自分を神の民を救うメシヤであることを時期尚早に表明することは極力避けられたのでした。

次に、イエスが地上にもたらされた「神の国」が、当時のユダヤ人たちの期待とは全く違っていたことに留意する必要があります。当時ユダヤ人たちはすでに自分たちの望むようなメシヤ像を描いていました。ですから、そのような既成のメシヤ像、メシヤに対する間違った概念をはらんでしまった用語を用いるのを避けて、ご自分を民の期待とは全く違ったメシヤとして、神の民に頭わす必要があったことは十分考えられます。ご自分こそ聖書が証しする父なる神から遣わされた真のメシヤであることを民に知らせるためには、間違った概念をはらんだメシヤ用語ではなく、まったく新しいユニークな表現を用いる必要があったのです。そこでイエスは、ヘブル語聖書ではすでに語られていたのですがまだだれにも用いられたことのなかった「人の子」という表現に目を留められたのでした。それほど、この言葉はイエスが用いられるまでは未知数で、神

を指し示すのか、人を指し示すのか、何れともいえないあいまいな要素をはらんでいたのです。

イエスは、マルコの福音書13：26で、再臨のキリストの出現に関して、「そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです」と語られましたが、これは、冒頭に引用したダニエル書7：13-14で、「見よ、人の子のような方が、天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく彼に仕えることになった」と預言されているメシヤの時代への言及としての引用でした。ご自分の再臨のとメシヤの時代を結びつけられたのです。また、マタイの福音書16：27-28では、父の栄光を帯びてくる「人の子」が、「雲に乗って来る」とそのまま引用されるのではなく、ダニエル書の表現を少し変えて、「御国とともに来る」と語られましたが、ダニエルの預言に通じていた者たちにとって、イエスが言われたことは重大でした。なぜなら、明らかに、獣にしかかなぞらえることのできないこの世の邪悪な王国がすべて滅びた後、永遠の主権と栄光で、神の御国を治めるために顕われるメシヤがイエスご自身であるという宣言であったからです。

イエスの時代の宗教的指導者たちにとって、もしイエスがダニエルの語った父なる神の御国を永遠に治める者であるとしたら、その「人の子」を拒絶することは父への反逆行為であり、神を敵に回し自ら滅びを招くことを意味したのです。イエスがダニエル書の「人の子」のくだりから引用されたことに対し、大祭司が裂くことの禁じられていた衣を裂いてまで逆上するという、モーセの掟を犯すほどのそのような逆上に表されたように、指導者たちが憤慨したのは当然でした（マルコ14：61-64）。イエスがダニエル書の引用で描き出されたのは、人類の父祖アダムに与えられた、全地の支配者としての約束「地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」を究極的に満たす人間「最後のアダム（第二のアダム）」（コリント第一 15：45-47）なるご自身でした。

詩篇8：4-8では、「人とは、何者なのでしょう．．．人の子とは．．．」と、人が神によって万物の支配者として置かれたことが語られていますが、ここでは「人の子」はあくまでも人間として描かれています。このように「人の子」という表現には、人間であることが強調されているのです。しかし、ダニエルが、メシヤとして来られる人を「人の子のような方」と表現し、何らかの点で「人の子」そのものとは違うことを暗示している点は見落としてはなりません。聖書の中で、『人のような』と表現される時、では『だれのような』なのかといえば、人自身が似せて造られたその方、「神」以外にないこととなります（創世記1：26）。したがって、ダニエルの見た「人の子」は神のような方ということになりますが、そのことは「雲に乗って来る」方であることから明らかなのです。

聖書では、雲は神のまといわれる衣で、人の前に御臨在を顕わされる時用いられたのです。見えない神の御臨在を人間が知覚するために、神は雲を人間にも見える媒体として用いられたのです。エゼキエル書に視覚的に詳細が描かれているケルビムの上の王座に座しておられる神の動きに雲が伴う様子は、まさに神の御臨在の描写でしたし（エゼキエル書10：1-4）、モーセが神が命じられたように神との「会見の天幕である幕屋」を造って奉献したとき、天幕に満ちたのは雲を媒体に御臨在を示された神ご自身でした（出エジプト記40：34-35）。同じことが、ソロモンがエルサレム神殿の至聖所に主の契約の箱を運び入れ、すべての建設作業を終えて奉献したとき、起こりました。そのとき、主の宮に満ちたのは、栄光とともに神の御臨在を象徴する雲でした（列王記第一8：10-11）。その他にも、神の御臨在を顕わす雲はイスラエルの民には馴染み深いもので、出エジプトの出来事の後さまよった荒野では、神が民を導いておられることの証しでもあったのです。

このように、ダニエルは「夜の幻」（ダニエル書7：13）の中で、「人の子」が神の衣「雲」をまといて来られたのを見たのです。ここで、諸国民がこの方に「仕えることになった」の『仕える』に用いられている用語は、ダニエル書で九回用いられているものですが、人に仕えるという意味ではなく、すべて神を対象として崇拝の意味で用いられているものです（ダニエル書3：12、：14、：17、：18、：28、6：16）。聖書では神以外の者は崇拝の対象にしてはいけないと禁じられている（申命記6：13）ことから、ダニエルの幻の中に登場する「人の子」は、諸国民に神として崇拝されていることが描かれているのです。人間としてこの地上にお生まれになったイエス・キリストを、神の聖なる役割を担うにはふさわしくない失格者にしようと、荒野でサタンがイエスに挑戦したとき、サタンは、『サタンを拜め。そうすればすべてをお前にくれ

てやる』という甘言でつろうとしたのですが、イエスのお答えは、申命記の引用で『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい』でした。イエスは人間として、神の言葉でサタン誘惑に勝たれたのですが、崇拝の対象が神のみであることは重要な聖書の原則なのです。

したがって、ダニエルが描いた「人の子」には、神であると同時に人である二面性が反映されているのですが、そこには、完全に人間としてこの世に来られた（初臨のメシヤ）と同時に、完全に神であることが再臨のキリストによって明らかになる、ユダヤ人のメシヤ、イエス・キリストのことが指し示されていたのでした。キリストの神性は、イエスの地上での宣教や言動で十分証しされたのですが、ヘブル語聖書においてより新約聖書の預言で、さらに強調されて描かれています。たとえば、ヨハネの黙示録からその例を見ることができます。イエスの愛弟子ヨハネがパトモス島で与えられたキリストの啓示の中に登場した「人の子のような方」は、「その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く」（黙示録1：14）と描かれています。これはまさにダニエルが「年を経た方」（ダニエル書7：9）、すなわち、神として描いた方の外観、そのものを呈していたのでした。

初臨のキリストは、神が『仮の庵に住まわれた』（ヨハネ1：14、邦訳の「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」には、仮の庵住まいのニュアンスが反映されていない）とヨハネが表現したように、計り知れない神のご計画のゆえに、神ご自身が人のレベルにまで身を卑しくされて、人として人々の直中に住まれ、人とともに肉体的、精神的、霊的すべての苦しみを分かち、十字架上で人類の罪を背負って死ぬために『苦難のしもべ』の道を歩んでくださった神でしたが、再臨のキリストはユダヤ人の勝利の王として、善と悪とを選り分ける裁き司として、また、崇拝されるべき神として、永遠の王なる神の支配をこの世に実現するために来られるのです。

ダニエルの預言に登場する「人の子」、イエスが好んで用いられた「人の子」、ヨハネに啓示を与えられた「人の子」をすべて結びつけると、以上考察したような意味を読み取ることができるのではないのでしょうか。人間の希望的観測や既成概念を完全に超えた『メシヤ像』を描き出すのに、これ以上にふさわしい表現はなかったのです。